

## 潮の満ち干

時代の潮流は満ち干する。アメリカの例を見よ。20世紀が明けてから1910年代までのアメリカでは、自由、平等、社会的責任、国民全体の福祉といった民主的価値理念が掲げられ、それらの実現のためには政府が私権に介入し、企業利潤を抑制することもやむを得ないと考えられた。「革新派の時代」には、崇高な目的のための緊張と自己犠牲が社会の合い言葉となった。

しかし、国民の緊張と理想主義は20年が限度である。やがて訪れた、新しいテクノロジー、流通革命、ニューメディア、都市化、若者文化の隆盛を中心とする繁栄の1920年代には、所有権が神聖視され、自由市場、適者生存の競争原理がもてはやされた。この「新時代」には、減税と均衡予算、規制緩和とゆるやかな独占禁止政策の運用により、水平合併を通じて次々とビッグビジネスが誕生していった。

続く1930年代、大恐慌に続くニューディールの時代は、規制強化の時代だった。政府は農産物市場、労働市場に直接介入し、産業に公正行為基準を求め、社会保障制度を導入して資本主義にセーフティーネットをとりつけた。40年代の世界大戦の間は戦時統制経済が出現した。

1950年代、アメリカ経済は均衡のとれた成長を開始した。再び「ニュー保守主義」と市場経済の10年間が展開された。しかし、休息の50年代は積極主義の60～70年代に引き継がれた。日本やヨーロッパでは高度成長が始まっていた。財政政策が必要だった。ケインジアンは積極主義の出番となった。不平等と不正義の拡大、幻滅と批判、知識人の疎外、物質主義への疑問。市場の失敗を分析する公共経済学が誕生し、「偉大な社会」を求める政治イデオロギーが勝利した。

緊張と道徳的努力の1970年代の後には疲労と幻滅が待っていた。レーガンの80年代は物質主義、快楽主義、民営化＝私生活重視＝ミー・イズム是認の時代となっていた。経済学も歴史的ビジョンを語らず、公的関心から行動主義的、数量的、数理的、純粹モデル的関心へと退いた。「ニュー保守主義」の50年代が「新時代」の20年代の再来であったように、80年代の「ネオ保守主義」は50年代を復活させた。

時代の寵児は市場万能論を展開したニュー・クラシカル・スクールであった。レーガン・サッチャー・中曽根の規制緩和と行革は、イデオロギー的にも政策的にも全面的な市場経済の復権を目指した。企業は大胆なリストラを進め、長い停滞期を抜け出したアメリカでは、

ハイテク産業やソフト部門で、知恵と努力で巨万の富を手にできるアメリカン・ドリームが復活した。

しかし市場も競争もグローバル化しネットワーク化した先端産業の現状の前では、古典的な市場万能論はアナクロニズムである。アメリカ経済で静かに進んでいる所得分配の不平等化にやがて社会は耐えられなくなるであろう。アジア経済危機は、グローバル資本主義の非道徳性を世界に強く印象づけた。だとすれば、新しい世紀と千年紀が始まる頃には、規制緩和一辺倒の潮流も再び流れを変えるに違いない。誰のため、何のための規制緩和か。よほどしっかり見据えておかないと、流されてしまうだろう。

日本貿易振興会アジア経済研究所

『ワールド・トレンド』 1999.8月号(第48号)